主題

まず、先学の論考から主なものを要約して次に掲げる。

1　**〈生きるために各自が持たざるをえないエゴイズム〉**（吉田精一）
2　**〈善にも悪にも徹底しえない不安定な人間の姿〉**（吉田精一）
3　**〈善と悪を同時に併存させているところの矛盾体である人間そのもの〉**（駒尺喜美）
4　**〈追いつめられた限界状況に露呈する人間悪〉**（三好行雄）
5　**〈世俗の虚偽的な価値や道徳に反逆する若者の自己解放〉**（関口安義）
6　**〈濃密な恐怖の雰囲気による美的な世界の創出〉**
〈昼の世界に対する夜の世界。日常的、世俗的世界の転換をもたらす羅生門という異空間〉（平岡敏夫）
7　**〈主人と下人の関係を転倒させる物語、下人がおのが生の《主人》公となる物語〉**（杉本優）
8　**〈〈語り手〉こそ下人の生きる観念の闇というアポリアに立ち向かう〉**（田中実）
9　**〈排除という秩序維持の機構を下人が相対化しあぶりだす「物語」〉**（篠崎美生子）
10　**〈語り手〉の〈意図のもとに出来事を語るという試みを貫徹することの限界を示す〉**（小谷瑛輔）
〈闇を語るという行為が抱え込まざるを得ない死角そのもの〉（石川巧）

主題は作者の意図と考えられるものとする立場から、往々にして「作者はこの小説で何を書こうとしたのか」という形で問われる。だが、作者の意図がそのまま作品に反映するほど虚構の創造は単純ではない。書き上げられた作品は作者を置き去りにして生きる。実際に書き上げられた作品について作者の注解があるとしても、それは多くの読み手の注解の一つにすぎない。授業では、主題を「作品の中心となる思想内容」と解すれば十分である。作品からくみ取れる「人間」や「人間にかかわる世界」（社会、自然など）の「あり方」についての中心的な考えを、指摘できればよいのである。中心的といっても唯一の正解があるわけではないことは、前述の要約を見るだけで十分に了解されることである。

授業展開を終えて、構成的に要約すると次のようになろう。

「盗人になる」ことにためらいがあった下人が、荒廃の羅生門楼上で老婆の「死者の髪を抜く」行為を目撃し、憎悪に駆られて老婆を捕らえるが、その老婆の「生きるためにしかたがなくしたことは許される」という弁明を聞いて、果断に「盗人」となって闇の彼方に去ったという出来事（を語る「作者」の誕生）。

ここから取り出しうる事柄を五十字ほどで要約してみる。

まず、契機を得て変わりうる人間の物語ととれば、

a　躊躇から決断、実行へ、という行動心理の側面で、

1　**人間は行為の正当化の口実を得たとき、初めてためらいを断ち果敢に実行に踏み出すことができる。**

2　**自己決定の逡巡を突き破るには、人間は他者の行為と言葉**

による保証の契機を必要とする。

また、行為の善悪を前面に置いて捉えるなら、

b　善悪の価値判断という側面で、

3　生きることを第一義とする限り、善悪を取り立てても意味はない。

4　善悪の範囲も濃度も相対的であり、立場や見方が変われば評価は一変する。善悪の判断に絶対的な根拠はない。

さらに、人間存在の特質に焦点を合わせると、

c　人間の宿業という側面で、

5　どんな行為も正当化せずにはいられないし、合理化できてしまうという言葉の戯れに生きる人間のあり方。

6　どんな行為にも必ず善悪の判断を加えずにはいない倫理的な存在である人間の特質を逆説的に証明する。

7　他者を拒絶し、その場の情動に左右されて自己中心的に行動する若者の空虚さ。

8　自己の行為の意味を突き詰めず、現実にしがみついて生きるだけの人間の生の実相。

9　人間は他者との関係の中で不確かに揺れ動く自己を抱えながら、自己の生を導いている。

d　創作を現在において展開する「作者」に焦点を合わせると、

10　古典作品や歴史的背景を自由に再構成して近代的な小説を創造する、寄る辺ない「作者」の誕生を描いている。

古いものや些細なものが捨てられ、すべてのものが進歩し、新しくなることが人間にとって常に良いこととは限らない。失ってからはじめて気づくようなものの中にこそ、かけがえのない、自分自身を確認する契機がある。

構成

構成1

羅生門の舞台と下人の動きを場面を中心に捉え、短編小説の典型として、全体を「起・承・転・結」の四段落に分かつ。

段落	ページ・行	段意
第一段	**「門の下」雨宿りの段** 初め～ P一八六・5〈そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。〉	**1節**（初め～P一八三・16）ある日の暮れ方、一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。打ち続く京の災害のために、羅生門の荒廃も著しい。 **2節**（P一八三・1～P一八五・10）主人から暇を出され、行き所のない下人は、飢え死にを避けるには、盗人になるよりほかにしかたがないと思案しながら、それを肯定する勇気が出ずにいた。 **3節**（P一八五・11～P一八六・6）下人はともかくも夜を明かそうとして、羅生門の上へはしごを上りかけた。
第二段	**「はしご」楼内うかがいの段** P一八六・7〈それから、何分かの後である。〉～ P一八九・9〈とうに忘れているのである。〉	**1節**（P一八六・7～P一八八・3）楼の上で、誰かが火をともしていた。下人ははしごを慎重に上り、楼の内に無造作に捨てられた幾つもの死体を見た。そのとき下人に死体の臭気を忘れさせるほどの衝撃が走った。 **2節**（P一八八・4～P一八九・9）死骸の中に一人の老婆がうずくまっていた。老婆は女の死骸から髪を抜き始めた。見つめる下人の心にあらゆる悪への激しい憎悪が燃え上がり出した。
第三段	**「楼上」老婆捕らえの段** P一八九・10〈そこで、下人は、両足に〉～ P一九二・4〈大体こんな意味のことを言った。〉	**1節**（P一八九・10～P一九〇・15）飛び出した下人は逃げる老婆を取り押さえた。無力な老婆を前に下人の憎悪は冷め、得意と満足を味わう。下人は老婆に何をしていたと尋ねる。 **2節**（P一九〇・10～P一九〇・15）髪を抜いてかつらにするという、老婆の存外平凡な答えに下人は失望を感じ、憎悪と侮蔑の心が動いた。老婆は、生きるためにしかたがなくする行為は悪とは思わないと弁明する。
第四段	**「楼上」引剝ぎの段** P一九二・5〈下人は、太刀を鞘に収めて〉～ 終わり	**1節**（P一九二・5～P一九三・11）老婆の話を聞いていた下人の心にある勇気が生まれた。門の下では欠けていた勇気である。下人は「俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」と言うやいなや、すばやく老婆の着物を剝ぎ取ると、はしごを駆け下りた。しばらくして起き上がった老婆が門の下をのぞき込むと、外には、黒洞々たる夜があるばかりであった。 **2節**（P一九三・12）下人の行方は、誰も知らない。

構成2

下人の心理の変化と連続を中心に捉えて、下人の行動との関連で、次の四段に分かつ。

第一段	「門の下」で座りながら、思案している場面の心理（初め～P一八五・10）
	1節 羅生門の状況（初め～P一八三・16） **2節** 考えあぐねる（P・一八四・1～P一八五・10）
第二段	「門の下」で立ち上がってから、「はしご」の上段で楼内の様子をうかがう場面までの心理（P一八五・11～P一八九・9）
	1節 寝場所を探す（P一八五・11～P一八六・6） **2節** 人の気配に気づく（P一八六・7～P一八七・16） **3節** 激しい憎悪を抱く（P一八八・1～P一八九・9）
第三段	「楼上」で老婆を捕らえてから、その話を聞く場面までの心理（P一八九・10～P一九二・12）
	1節 満ち足りた思い（P一八九・10～P一九〇・15） **2節** 期待はずれ（P一九〇・10～P一九二・4） **3節** 考えが固まる（P一九二・5～12）
第四段	「楼上」で老婆に対して引剝ぎをして、立ち去る場面の心理（P一九二・13～終わり）
	1節 非情に剝ぎ取る（P一九二・13～P一九三・11） **2節** 行方不明（P一九二・12）

この構成の下で、下人の心の動きを逐次的に追ったものが、次の表組である。

場所	段落	様態	下人の心理（心の動き）	下人の行為・状況
門の下	第一段	漠然	「大きなにきびを気にしながら」 「ぼんやり、雨の降るのを眺めていた」	日暮れ、羅生門の下 雨やみを待つ
		思案	途方に暮れる ← とりとめもない考えをたどる 「（飢え死にを避けるためには）手段を選んでいる暇はない」 「選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがない」 ← ためらい 「積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた」	失職による生活不安 羅生門の荒廃、晩秋の日暮れから夜への推移、雨などの重苦しさが、Sentimentalisme に影響 〈陰鬱な状況下での不安〉 〈実行の不決断〉
はしご	第二段	躊躇	ともかくも、夜を明かそう 「雨風の憂えのない、人目にかかるおそれのない、一晩楽に寝られそうな所があれば」 ← 高をくくる 「人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」	迫る雨風の夜の寒さ 〈心身の疲労〉 寝るところを探す はしごを見る 〈休める場所という意識〉
		警戒	緊張　「息を殺しながら、上の様子をうかがっていた」 恐れ　「恐る恐る、楼の内をのぞいてみた」	のぼりかけて火を見る 上まではうように上る 〈予期せぬ事態への身構え〉
楼の上		衝撃	ある強い感情　「六分の恐怖と四分の好奇心」 ← 少しずつ、恐怖が消え、憎悪が動いてくる ← 激しい憎悪　「あらゆる悪に対する反感」	雨の夜、死体が転がる楼上 死人の髪を抜く老婆を目撃 〈異常な状況下の異様な光景に対する衝撃〉 情緒的、感覚的反応

楼の上 ―――――――― 門の下

段	区分	内容		行動
第三段	自足	勝利者の意識　「老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されている」 ← 憎悪の沈静化　「安らかな得意と満足」	↑	老婆をねじ倒す 〈勝利者の余裕〉
	疑問	← 老婆の行動の訳を知りたい 「何をしていたのだか、それを俺に話しさえすればいいのだ」	↑	老婆に問う 〈行為への疑問〉
	意外	老婆の平凡な答えへの失望 憎悪の復活と冷ややかな侮蔑	↑	老婆の答えを聞く 〈期待外れ〉
	契機	ある勇気 「門の下で、この男には欠けていた勇気」 「老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」 ← 飢え死には意識の外	↑	老婆の弁明を聞く 〈口実の発見〉
第四段	断行	老婆への嘲り　「俺が引剝ぎをしようと恨むまいな」	↑	老婆への念押し
		← 正当化　「俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」	↑	老婆の論理を逆手に取る 〈口実の投げ返し〉
		← 果断な行動 「すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った」 「手荒く死骸の上へ蹴倒した」 「瞬く間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた」	↑	老婆の着物を剝ぐ 〈踏み切った一歩〉
	断絶	永遠の添　「下人の行方は、誰も知らない」	↑	夜の闇に消える 〈宙吊りにされた未来〉